
とあるミサカの黙示録

吐露非狩古鬱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるミサカの黙示録

【Nコード】

N4057G

【作者名】

吐露非狩古鬱

【あらすじ】

夏休みの寸前、俺はミサカと出会った。何千ものミサカのうち、たった一人のミサカに——ミサカと、とある能力者のスピノフ作品です。原作の平行ルとお考え下さい。

その少女と出会ったのは、ちょうど夏休みに入る前くらいだ。

だが、その『少女達』の秘密を知ったのは、少しばかり経った頃だ。

とりあえず、順を追って話そう。

どっからが良いかな……

じゃあ、始めから話そう。あの少女との出会いを――

俺は下北 翼。学園都市なんていう、いささか奇抜で不思議な街で暮らす、『普通の』学生だ。

『普通』ってのは、この学園都市の中で。一步外に出れば、それこそ俺は神様だ。

普通で居られるのは学園都市特有のレベル別認定で、俺の能力が『レベル3』に認定されているからだ。

これがレベル4の大能力や、ましてやレベル5の超能力なんてのは、かなり人間離れしている。

ちなみにテレポーターは例外無くレベル4認定を受ける。

有名なのは常盤台中学の白井 黒子。レベル5の御坂 美琴と関係を持つて……という噂だ。

俺とは絶対に馬が合わない。反りが合わない。

そんな俺も中学生。常盤台中学にも近い、フツーの中学だ。

特に目立ったカリキュラムも無く、世間一般的には『まあまあ』な学園。

あ、そうだ。

俺の能力は『荷電粒子』（エレクトロ・ビーム）。イマイチパツと

しない名だ。

大気中の重粒子を荷電化させ、荷電粒子ビームとして発射もできるが、条件が限られ、更に自分の電力だけでは到底ビーム発射は不可能なので、レベル3留まりだ。

しかも大気中では、電磁波や地磁気、雨、重力や自転の影響で荷電粒子線が直進しないのだ。

つくづく厄介な能力だ。

俺が荷電粒子を発生させる場合、たいていは左眼が発光し、左眼からビームが出る。

その影響か、左眼は少し青い。特に発光した時はかなり目立つのだ。ホントに、つくづく厄介だ。

「どうすつかなあ……」

俺は学校帰りの夕方、完全下校時刻の手前辺りで、街をぶらぶらしていた。

「……暇」

とにかく暇だ。夏休み前つてのは気が抜ける。テストも無難に終わり、宿題つたつて申し訳程度だ。

そんな暇で暇でしょうがない夏休みを前にして、とある少女と出会った。

はつきり言つて、『え？』だったね。

独特の常盤台中学の制服。

ま、これだけでもかなり目立つ。問題はその後だ。

頭にゴツイ軍用ゴーグル付けて、そして私ボーツとしてます、みたいな無表情。

目には、ハイライトが無い……？ようにも見える。

でも、まあ、とりあえず、第一印象は、その、『可愛い』だったね。しょうがないだろ！ホントに可愛いんだから！

無表情さえ無ければ、ついでにゴーグルも無ければホントに魅力的

だろう。

なんだろう。昔から趣味がおかしいなんて言われたが、そんなことは無い。

無表情美少女だっていいじゃないか。取っ付き難い無表情は嫌だが、天然混じりの不思議少女つてのもいいじゃないか。

………やっぱり変か？

その無表情美少女は、近くの公園でしゃがんで何やらナニしていた。何気に近付いて見てみる。

少女の前には段ボールが置かれ、中には、

「……猫………」

しまった。声に出してしまった。

少女は、ゆっくりこちらを見た。色彩に欠けた目で、こちらを見つめる。

うん、やっぱり可愛い。

少女は手にパンを持ったまま、目をパチパチさせながら首を傾げた。なんだか気まずいので、声をかけ、

「…何かご用ですか？と、ミサカは質問します」

られなかった。先に話しかけられてしまった。

ふうん。結構綺麗な声だ。

にしても、ミサカは…何？

「何故困った表情をなさるのでしょうか、と、ミサカは再度質問します」

「い、いや…」

正直、話し方に凄く違和感がある。

この娘が『ミサカ』というのは分かった。って、

「もしかして…御坂……？」

「？…私の名は『ミサカ』、で正しいのですが、何故貴方がご存知なのでしょうか、と、」

「ちょ、ちよっと待って…ホントに常盤台中学の……？」

だとしたら相当に噂っていい加減だな。

知り合いの馬鹿に聞いた話だと、その馬鹿の更に知り合いの馬鹿（つまり俺の知らない馬鹿）が、御坂 美琴と知り合いで、詳しいことは知らないが、御坂は相当にやかましい、利発で、勝ち気な奴だと聞いた。

少なくとも目の前の御坂は、全然違う。

「貴方の言う『御坂』はお姉様の事でしょうか？と、ミサカは推測します」

「え…別人？」

「私もミサカです。とミサカは説明します」

説明になってない。

…ああアレか。姉妹か。と、一般的な思考を巡らす。

「少し違います…と、ミサカは…」

「ああ、分かった分かった、で、そのミサカさんは何してんの？」
一方的に会話を中断し、パンを持ってしゃがんで猫と対峙している理由を聞いた。

ミサカは少し戸惑ってから、ポツリポツリと話し始めた。

「ミサカは微弱な電磁波を発しています…動物はそれを敏感に感じています、とミサカは前置きします」

なるほど、猫が嫌がってんのか。

「悪いけど、俺も荷電粒子…電気使いだから、動物も苦手だと…」
ミサカが再度見上げてくる。

「…そうですか…仕方ないですね…とミサカは諦めます…」
うーん。なんだか可哀相だな。しかしどうしようも無いのも事実だしな…

それより一番気になり続けたのが、
「何で…ゴーグル付けてんの…？」

ミサカは頭上に視線を走らせ、

「…………ミサカです」

と宣言した。

さっぱり分からない。

結局ミサカはテクテクと帰った。

多分常盤台だろう。

話している内に完全下校時刻になり、ミサカが、

「ミサカにもスケジュールがありますので」

と言った為、すぐに別れたのだ。

しかし、可愛いな。すっかりあの喋り方にも馴れた。

え？早過ぎる？

仕方ないだろう、可愛いんだから。

数日後、さあいよいよ夏休みだぞ、を迎える頃。

あれからミサカは見えていない。「そっぴや…」

ミサカは微弱な電磁波を発すると言っていた。

つまりは電気系統の能力者なのだろう。俺と似たような。

これでも意識さえすれば、電気を感じることが出来る。荷電粒子には欠かせないしな。

気配がしたら探してみよう。

そう思った。

だがその頃、『ミサカ達』が、学園都市の陰謀によって操られていることを、まだ知る由も無かった――

「居た……」

見付けたのだ。あれから一週間。

あの公園でミサカを発見した。例の段ボールが置かれていた場所だ。しかし今は段ボールが見当たらない。

そのせいか、ミサカの少し残念そうな、哀愁を漂わせる背中を見た。

「よ」

「……あ……」

ミサカも覚えてくれていたようだ。

「段ボール…無いな？」

俺の隣に佇む少女はコクツと頷き、おもむろに歩きだす。

「…心配…なのか…？」

「私が今感じているのが、それなのかは解りかねますが…とミサカは説明をします……」

ミサカは隣でポツリポツリと話し出す。

「毎日来ては、ミサカはエサをあげていたようなのですが、今日は朝からいませんでした、とミサカは少々淋しげに呟きます……」

「……可愛がつてたのか？」

「………御坂お姉様の影響と考えられます…とミサカは推測します」
姉妹…なのか？ミサカだし、お姉様って呼ぶし、電気系の能力者だし、常盤台中学。共通点が多い。

「……残念だなあ……」

「間を持たせようとしているのが見え隠れしますが、好意的に受け取っておきます、とミサカは答えます」

「まあいいけど…猫に名前とか付けたのか？」

「………ライオン……」

「強過ぎるだろ！確かにネコ科だけど！」

俺はツツコミを入れた。すると、ミサカはこちらをジッと見つめ、

「じゃあネコ」

「そのまんまじゃねえか…」

こんなユルユルな会話、世界でたった一回しか行われないうな。

「…ところで……」

「え？どうした？」

珍しくミサカが話しかけてくる。

「名前」

「猫の？」

「貴方の」

「あ、ああ……」

そういえば俺の名前を教えてなかった。不覚。
素直にフルネームで教えてやる。

「……それで、何故私に？とミサカは問い掛けます」

私に？というのは、『何故私に近付いたの？』という意味だろうか。
だがミサカの目は、決して訝るような感じではない。穏やかに見つめてくる。

ヤバイ、目を合わせられない。

「いや……猫、好きだし……」

これは事実だ。

「……それだけですか？とミサカは更に問い掛けます」

「……ゴーストが気になって……？」

うわぁ！何言ってるんだ俺！今すぐ感電死してえ！！

だがミサカは首を傾げ、よく分かりませんが、と付け足し、俺の歩調に合わせた。

……俺と歩いてる？

「顔が赤いようですが、夏風邪でもひいたのですか？と、ミサカは少々真剣に尋ねてみます」

ミサカが俺の顔を覗き込む。再び目を逸らす。

すると再び目を合わせようと、俺の顔を追いかける。

「……違えよ……」

「…………？」

ミサカは、俺の頭が150度くらい回ったところで諦めた。

「何か怒っているのですか？」

「別に……？」

くそ。こんな言い方しか出来んのか。

と、前方に自販機。お誂えだ。

「……何か飲むか？」

「？……あ」

自販機に気がついたようだ。前にトテトテと歩いていき、

「これ」

ジュースの一つを指差す。

正直な話し、この時の俺は、ジュースよりもミサカの指を見ていた。綺麗な指だった。

これも俺が指フェチと言われる所以だ。綺麗な指や爪を見ると、妙に萌える……のだ！文句があるか！

「これか」

気を取り直し、小銭を入れて、ミサカがボタンを押す。

ミサカがしゃがんでジュースを取る間、俺がお釣りでもう一本買う。ミサカはレモンスカッシュソーダ。かなりビリビリしそうだ。

俺は無難なレモンティー。

まあ似たような感じだな。

ミサカはレモンで、おまけにソーダという、恐ろしくキツイ組み合わせのジュースをゴキュゴキュと飲み、プハー、とした。

……好きなのかな？

「美味いか？」

「……キツイです」

「だろうなあ……」

『と、ミサカは』を付けるのも忘れるくらいにキツイだろう。

「……レモンティー、飲まないのですか？」ミサカは尋ねます」

ミサカは俺のレモンティーを眺めた。

買った方がいいが、何故か妙に甘く、交差点を越え、更にもう一度交差点に差し掛かるまで、3口くらいしか飲んでいない。

「……いや、甘くて……欲しいの？」

「……」

無言の圧力。

いくらなんでも、俺が飲んだボトルをミサカが飲むってのは……どうかと……

「何か問題でも？」ミサカは問い返します」

「お前わざとか…？少しは恥じらいつてものをなあ」

ミサカは既にレモンティーに興味を失ったようで、学園都市の特徴、風車に目を向けていた。

「放置プレイかよ……」

「………そういう趣味があるのですか？」と、ミサカは少々真剣に尋ねてきた。

「し、真剣にするなっ……」

俺は少し焦った。

またもう一つ、交差点が現れた。

俺は左側、ミサカは……常盤台中学なら右方向だが…

「右か？」

率直に聞いてみた。ミサカは、無表情の中に意外そうな色を混ぜ、

「いえ、左ですが、とミサカは答えます」

「家、こつちなのか？」

「いえ…（『家』と『いえ』で駄洒落ではない…と思う）…家と言われれば違う方向ですが、スケジュールがこちらの方向なので……」

なんだか、少し悲しいような、辛いような表情を僅かに見せた。

まあ彼氏ではないよな。多分。

というわけで、そのまま左に転進。

何にしても女の子と肩を並べて歩くなんてのは、今まで経験したことは無かったから楽しいものだ。

だが気になるのは、ミサカが度々口にする、『スケジュール』。なんだろうな。もし彼氏とデートだなんて言ったら泣いちゃうぞ。

「なあミサカ」

「？」

「……スケジュールって、何かあるのか？」

と、ミサカは突然こちらを見つめ、どこか真剣な目をする。気まずい…

「貴方は、…関係者ではないと判断しました、これ以上の介入は許されません、とミサカは突き放します…」

「ちょ…っと待てよ…関係者…って？」

ミサカは話したいような、でも踏み止まったような表情で、

「……貴方を巻き込むのは厳禁です…とミサカは……」

気がついたら、俺はミサカの肩を掴んでいた。

そんな泣きそうな目で突き放すな。勿論、ほんの微細な感情の起伏だったさ。

でも無表情の瞳の奥に、6mmくらいの哀しさが見えた。気のせいかもしれないが、それでも放っては置けないだろう。

「……ミサカは……」

ミサカが、ばつが悪そうに目を逸らす。どこか不自然な、ちょっと人間くさく動いてみました、みたいな動き。

「……大丈夫です。明日には、『問題無く』終わっています、とミサカは断言します」

「…俺には…無理なのか？」

「結果から言えば、そうなります…大丈夫です………」

「そう、か……」

そう言い残して、ミサカは行ってしまった。しばらく見ていたが、港の資材置場に走っていき、見失った。

俺は、ただその背中を見送ることしか出来なかった。

夜。

気になるものだ。

いまだにミサカの瞳が忘れられない。

なんでだろうな。たった二回しか会っていないのに、こんなに気になる。

やっぱり、ミサカが可愛かったからかな。

俺は考える前に学生寮を飛び出した。

ふむ。確かに、資材置場から爆音が聞こえる。
つまり、ミサカが何かしら重大なことに関わっている、ということだ。

どうするか、なんて決まっている。会って確かめたい。それだけだ。

俺が来たとき、資材置場は地獄のようだった。

鉄であるはずのコンテナが熔け崩れていた。

鉄骨がひしゃげていた。

地面もえぐれていた。

「なんだ…これ…?」

ミサカがやったというのだろうか。確かに電気を使えば、鉄を溶かすくらいは出来る。

だが地面を弾けさせたり、鉄骨を複雑に曲げるなんて出来るかどうか。よっぽど器用じゃないとなあ…

また違う場所で、今度はマシンガンのような、連続した爆音が聞こえた。

走った。汗がボタボタと滴る。

爆音はすぐ近くだ。このコンテナを越えれば、

「居た……! ……………っ?」

確かにミサカは居た。だがもう一人。

異質、といってもいい存在。

白い頭に、骨みたいな模様のシャツ。それに身体もかなり白い。

間違いない。

学園都市最強の超能力者、アクセラレーター『一方通行』。

その少年と、ミサカが闘っている。

拳でも平手打ちでもなく、ミサカは重たいマシンガンに、ゴーグルを付け、闘っていた。

何故? 学園都市の最強レベル5に、何故ミサカが銃を乱射している?

ここは法治国家だぞ! と叫んでやりたかった。

だが見つかるのが、とてつもなく恐い。

一方通行は、何の冗談か鉄骨を蹴り、そのまま跳んでミサカに接近した。

ミサカが銃を撃つが、全てが弾き返される。

デタラメ人間の万国ビックリショーだ。

ミサカが傷を負った。肩口が裂け、血が吹きでた。

ミサカが一旦下がった。

コンテナの陰に隠れ、一方通行が舌打ちするのが見えた。

この位置なら、一方通行に見つからずにミサカに会える。

急いでコンテナからコンテナへ渡り、ミサカを捜す。

「ミサカ！」

ミサカはワテンポ遅れてコンテナから飛び出し、俺の姿を見るなり絶句した。

「何故……？」

「……関係者ってことは……何かの試験か……？」

俺は出来る限り脳を回転させ、状況を分析した。

関係者、俺には無理、関わってはいけない。

つまりミサカにだけ可能で、関係者以外には危険。ミサカに対しての試験かと、俺は推測した。だが、

「……違います……これは、最強の更に極み、レベル6を作り出す為の、人為的な実験……貴方には危険です、とミサカは……」

「実験だと？何だよそれ、現に怪我してるじゃねえか！」

「私、ミサカのレベル6覚醒ではありません……一方通行の、です……」

……

「レベル……6……？」

聞いたことがない。通常、学園都市のレベルは0〜5だ。レベル5は7人しかおらず、1や2ならそこら中にいる。

「研究の結果、レベル5以上の能力者、『レベル6』が存在することが判明。一方通行のレベル6覚醒条件は、2万人の『妹達』^{シスターズ}の被害。実験の対象となる『妹達』は、御坂お姉様の体細胞クローンと

して生み出され——」

突拍子も無いにもほどがある。

クローンに実験、2万人、妹達、レベル6、殺害——

そんなことを淡々と説明するミサカが、とてつもなく遠く、儚く、悲しげに見えた。

総てを理解し、頭で並び替えて構築するのに、少なくとも1分はかかっただろう。

その間もミサカは、穏やかに俺は見つめていた。

「実験……？お前が……クローンだっていうのか？……御坂美琴の」

「はい、今まで一方通行による妹達の殺害数は、9931人。私のシリアルナンバーは9932……と、ミサカは懇切丁寧に説明しました……」

理解しなくなかった。何千ものクローン。目の前に居るミサカが、その一人だと。

途端に、左のコンテナが弾け、危うく潰されそうになる。

何も考えずにミサカを抱えて走った。すぐ後ろでコンテナが吹っ飛び、振り向いた視界の端で一方通行が歩いてきた。何千のミサカを殺し、俺が手を引いているミサカを殺さんとする男。

「……して」

ミサカの声が微かに聞こえた。

「……離して……下さい……」

「え？」

「……貴方はここに居るべきではありません……とミサカは……」

「違う！」

ミサカの手がピクツと震えた。

またか。あの時、段ボールの前で困っていたミサカに何もできなかった。

悲しげなミサカを前に何もできなかった。

少しは役に立ちたいさ。……可愛いからな。

「何故ですか……私は2万人の妹のうちの一人です。貴方が接した

ミサカの情報は、ミサカネットワークを通じて全てのミサカに共有されます…」

ミサカは走りながら、俯きながら呟く。

「私自身に、一般的な個性を求めることに何の特殊性もありません……と…ミサカは……」

そこで声が潰えた。

理由は簡単だ。

俺が抱きしめたからだ。

ミサカはきつと、驚きに目を見開いているだろう。二回しか会っていない男に抱きしめられたんだからな。

「違う……ミサカが何人居たって…俺と一緒にレモンソーダを買ったのは……お前だけだ」

「違います……」

ミサカは泣きそうな声で呟く。

「……あなたは…レモンティーでした…と、ミサカは反論します……」

「そうだったな……」

一方通行が放った爆音が、ミサカを震わせた。

煙の中、ほっそりしたシルエツトが見えた。ホントに、地獄だ。

「ミサカ…逃げろ」

「？」

「こんな運命、嫌だっただろ！？なんで無理に受け入れようとするんだよ！」

「それが…ミサカです………」

ミサカが俺の手を取った。

俺の眼を一心に見つめ、

「貴方の演算能力と、貴方自身の電荷量では、荷電粒子線を放つのは不可能と判断しました…とミサカは前置きしました…」

またもう一步、ミサカが踏み出した。手はしっかりと握りしめてくる。

「ミサカネットワークによる並列演算、及びミサカのもつ電荷を伝達します」

俺とミサカの間の空間が、これまで以上に縮まる。

ミサカの左手が、俺の右頬に触れた。

「と、ミサカは……………」

ミサカと俺の唇が重なった。

全く予想外の行動に、セオリー通りに目を閉じる余裕もない。

と、突然脳に電気が走る。口から響くその衝撃は脳を駆け巡り、脳が新しく構築される感覚が訪れた。

ミサカの唇が離れた。

ミサカはいつもどおりの無表情で、

「ミサカネットワークの一部に、貴方の脳を介入させました。大気中の重粒子、その他の要素の演算が効率化されます」と、ミサカは説明しました」

確かに、周りの感覚が違って見える。ミサカを通じて、様々な要素が、そしてどうすれば効率的に荷電粒子を発生できるかが、手に取るようにわかる。

唇はほんのり暖かく、まだミサカの感覚が残っている。手からは、電気が流れ込むような感覚が続く。

あの煙の向こうを凝視した。

彼は俺の存在を知っているだろうか。なら今頃、俺は生きていないだろう。

左目が発光する。空気中の粒子を荷電化させ、ミサカの電力を利用し、一気に加速させる。

目のシルエットが立ち止まった。蒼い光が広がっていくのだ。ミサカとは違う、明らかに異質の存在に戸惑ったのだろうか。

「ミサカ……………」

「……………」

今更だな。やっと気がついた。

俺はこいつが、好きだったんだな――

人生でも最大級の荷電粒子線は、辺り一帯を青白い光に染めた。

あまりにも強烈な光は、俺のみならず、一方通行の目もいくらか眩ませたようだ。

何の冗談か、俺が放った荷電粒子線は、はね返って俺にまで直進していた。

ミサカが俺の体を、横に投げなければ死んでいた。

じっと眼を閉じていたようだ。それでも眩しそうに、俺の手をひいて脱兎のごとく駆けた。

後ろから、一方通行のものと思われる声が聞こえた。

既に視界を回復したようだったが、不意を突かれたのは大きかったようだ。

景色は街に移りかけていた。

「ミサカ……………」

「……………貴方に対するこの感覚が、どのようなものと定義されるかわかりませんが……………」

いつの間にか立ち止まって夜の街で、せえせえと肩を揺らしている。未だにミサカネットワークの、電波的な感じが残る。頭が熱っぽい。それより気になるのは、

「お前……………ミサカネットワークで…管理、されてんだろ……………？どうなるんだ……………お前……………」

ミサカは、その事かと言いたげに眼をパチパチさせた。

「既にミサカネットワークを、貴方の介入による混乱に乘じ断絶してあります、と、ミサカは説明します。管理上、9932番と分類させるミサカは死亡しています……………」

「……………そっか……………」

「はい……………」

「安心、した……………」

そう言った後、意識が遠のいて行つた――

次に目覚めたのは、妙に余所余所しい感触のベッドに違和感を覚えた時だった。

目を開けると、綺麗な白い天井が現れた。

紛れも無い、病院だ。

何だか硬いベッドから身を起こすと、右手に暖かい感覚を感じた。見れば、ミサカが手を握ったまま眠っている。突っ伏している為、顔は見えないが、多分穏やかに寝入っているだろう。タイミングよくドアが開き、カエル顔の医師が入ってきた。

何だか間抜けというか、頼りない顔だな。

「目覚めたかい？」

人の良さそうな声で聞かれた。

見てわからんのか、と言いたいがどうせ社交辞令なので聞き流す。

「大変だったよ？その娘の身体は極端に弱体化していてね、肉体的には健康でも、寿命は持つて数年。ついでに、君の脳も謎の神経接続で混乱状態にある。ま、君の方は問題無く生活出来るけどね」

一気に言われても、状況がよく飲み込めない。

俺は問題無い。

じゃあミサカは？

「大規模な治療が必要だね。極端に短い寿命、これが何なのかよく分からないけど、とにかく何処かに搬送しないと」

ミサカは近い将来、死ぬ。

クローン特有の短命。聞いたことがある。

それを、ミサカは生まれながらにして背負っているのだ。

カエル顔の医師は、近くの椅子に腰掛ける。

「助かるんですか……？」

カエル医師は肩をすくめ、

「五分五分」

とだけ言った。

でも迷いはしなかった。たとえどれだけ時間がかかろうとも、たとえ薄命の運命を背負ったままだとしても、

「俺、待ちます……コイツのこと……」

カエル医師は初めて微笑んだ。

ミサカが目覚めた後、事情を説明し、海外での治療が必要だと告げた。

ミサカは無表情だったが、話し終わると俺の手を両手で握り、

『待ってて下さい』

と言った。

その夜、特に何ごととも無く寝入った。

我ながら情けない、と思うが仕方ない。手を出すには無理があった。何故ならミサカは、その晩に出国していったからだ。

別れの間際、ミサカは少しだけ笑んで、出ていった。

こうして俺は、夏休みを病院で迎えた。

ある日――

その少女と出会ったのは、ちょうど夏休みに入る前くらいだ。

暑い日差しの中、うんざりしながら公園を歩いていた。

公園の木の下に、段ボールが置かれていた。

その前に、しゃがんで猫にエサを、パンをあげている少女がいた。
待ち続けた少女に出会った。

愛しいと思った少女に。もう迷わなかった。

あの時と、同じ――

ゴーグルは無かったけどな――

（後書き）

割りとおっさりな感じかと思います。

ちなみに、ミサカのキスはミサカネットワークへの介入の為であり、唇は指先並に神経が密集しているので、ちょうどいいと思ったからです。

他意はありません。多分…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4057g/>

とあるミサカの黙示録

2010年10月15日01時27分発行